

# ろくおん通信

20号

1989.10.15  
盲人情報文化センター  
録音製作係

—————良いテープ図書を作るには—————

何を今さらと思われるかもしれませんが、がほんの一寸の気くぼりで今以上に素晴らしいテープ図書ができると思います。

川端さんのおめでたに拍手をおくりながら、悩みは職員の減少です。必然的にボランティアが、職員に頼っていた部分を埋めることになるのではないのでしょうか。

ある日の午後各パートより16人の方に集っていただいて、言いたいこと、聞きたいことをワイワイガヤガヤと話し合っていました。即解決されることはありませんが、その一部を紹介しますので、再確認の上、ご意見がございましたら、お寄せ下さい。

## 《ベア録音について》

(現在、原則としてベア録音が規定されています。)

- 1) 雑音、誤読が少ない。(編集より)
- 2) スタジオが有効に使える。(館より)

等の理由でベア録音を義務づけられています。種々の事情で出来ない方も訂正だけは必ずベア録音をすることに決めてはと言うご意見が出ています。

## 《図・写真説明について》

- 1) 視点によって説明表現が三者各々に異ることがあって、納得のいかぬまま音訳することもあるが.....
- 2) 編集でも、聴いていて流れから違和感があったり、煩わしかったりすれば指摘することもある。
- 3) 断定不可能な場合でも何も言わない訳にいかない、本文や他の参考資料をもとに説明文を作成することもあるし、危ないものはふれないでおくこともある。
- 4) 説明を必要とする本を多く音訳する者は、他の本の説明を聴いてみるのも参考になるのでは.....
- 5) 図・写真・その他処理の仕方の勉強会を集中的に持つべきではないか。

等、音訳の段階での意見が多く、又音訳者は自主性をもって校正箇所を訂正するか否か、判断を下すべきであるとのことご発言もありました。

→ 6ページへ続く

1989. 9. 21

蔵書、リクエストを問わず、私たち音訳者にとって外国語の処理は避けて通れない作業であることは、皆さんがよくご存じの通りです。なかでも英語は、日本語の出版物の中に使われることが次第に増えているように思います。また、日常生活においても、善し悪しはともかく、さまざまな英語があらゆる所に氾濫し、私達の目や耳に飛び込んできます。しかし、残念なことに音訳の現場は、この状況に対応するための積極的な取組みをしてこなかったように私には思われます。努力は個々人に任されたまま、英語の音訳に関しては、日本語の校正におけるような厳正さは望むべくもなく、そこに大きな落差があるのは否めません。原本の中の英語をもう少し理解しやすく、丁寧に利用者の耳に届ける工夫があつてしかるべきではないかと思ひます。勿論、英語の参考書、問題集、教科書などの音訳についても考えるべきことは山積しています。そういうわけで、七月から三回にわたり研究会の名目で、問題提起の場を持たせて頂きました。思いがけないほど多くの方々に興味を持って参加下さったお陰で、率直な話し合いの機会が開けたことを感謝しています。蔵書、リクエストの音訳者をはじめ、対面朗読の方々、校正者、編集者、そして勿論職員の方々との議論の中から、とりあえず実行出来るもの、工夫出来るものなどの提案をまとめてみました。これはまだ、限られた経験の中からの提案の第一歩に過ぎません。これから当事者の皆さんのご検討を待ち、将来、英語についての音訳マニュアルに発展させて頂くことが出来ればと、願っています。

館長代理の平野氏のお話によると、最新鋭の歌文用音声読書機は実に見事な発音で活字を音声化するそうです。しかしその活躍の場は現在のところまだ限られていて、私達が扱うような日本語と英語などが混在するものについては、まだまだ人間の能力に頼らざるを得ないわけです。機械の隙間を埋めるのは、利用者の立場に立って具体的な工夫や処理を取捨選択できる、人間の柔軟な知恵だと思ひます。

職員の清水氏から英語チームを発足させたいとのお知らせがありました。とりあえず、現在リクエストされている大学受験問題集、参考書などを数人で担当しながら勉強していくことになりました。やってみようかな、と思ひながら能力を眠らせていらっしゃる方、どうぞご参加下さい。仲間があつてこそ、よい仕事が出来ると、信じています。

( 古谷 穹子 )

「英語」音訳についての提案。

A. スペリングの読みについて。

1) 英語以外の外国語も原則として英語読みをする。ただしその言語特有のアクセント記号などはそのまま読む。

2) 大文字、小文字については、人名、地名など大文字で始まることが自明の単語の場合は、原則としてその区別を云わない。また、「大文字」とことわらない場合は、すべて小文字であることとし、BRITAIN などは、はじめに「全部、大文字」と、いれる。したがって、「大文字」は、その一字のみが大文字であることになる。

註：1) と 2) については、録音図書凡例や音声訳者註などで、了解事項としておくことが望ましい。

3) 引用文献などの場合も、前置詞、冠詞など、ごく平易な単語のスペリングは、云わない。

4) アルファベットの一語一語を、明瞭に強く発音する。d と t の区別が付きにくいからと云って、d を「デー」と読むのは避けたい。本来の英語の発音を崩さずに、聞きわけてもらえる努力をしたい。

例えば、boat の綴りを云う場合、「ビー オー エイ テイ」と、平板に続けて云うより、一字ごとに語尾を撥ねあげるようにして、強く発音すると聞き易い。

例：boat [ ビー オー エイ テイ ]。

5) 英語には、漢字における偏やつくりのように、意味を持った接頭語、接尾語などがある。

例：接頭語 con-, de-, dis-, ex-, mis-, re-, sub-, un-, など。

接尾語：-able, -ing, -less, -ly, -ment, -ness, -tion, -tive など。

これらは一かたまりの綴りとして、やや早めに読んでも理解されやすい。このことを踏まえた上で、三字くらいを続けて読むことが望ましい。

例：holiday 「holi-day」

Leonardo da Vinci 「Leo-nar-do da Vin-ci」

entertainer [ en-ter-tain-er ]

6) スペリングを読むスピードについては、上の 4) と 5) の処理が適切に出来れば、ただ一様に早すぎて理解しにくいとか、遅すぎてまだるっこしいと云った問題は軽減されると思われる。自分が利用者の立場になった時、書き取ることが出来る

読みであるかどうかを、常に念頭に置きたい。

7) センテンスやフレーズの中で、部分的にスペリングを云いたい場合、原則としてセミコロン、コロン、ピリオドなどのところまで読んでから、何々は・・・と、入れる。

例：His son, Leigh, is a graduate of Yale. Leigh は・・・、Yale は・・・と、ピリオドのあとに入れる。

## B. 文章を読む場合について。

前述したように、日本語の出版物を音訳する場合にも、英語の引用文や、挿入文などを音訳しなければならないことがある。英語をとくに得意とする音訳者でない場合、困惑や困難を感じざるをえない。加えて、日本語と違い、利用者と音訳者の双方に英語についての知識、キャパシティのばらつきが大きいことが、時には理解を妨げる要因になりがちである。双方が抱えるこの少々厄介な問題に、いくつかの工夫を試みてみたい。

- 1) 意味を理解し、フレーズごとに、区切りを持たせるような読みをする。ピリオド、カンマなどの間をきちんと取る。センテンスの頭をたてる。これらは、日本語の音訳技術となんら変わらない。
- 2) 複数形や過去形など語尾に意味のある単語が多い。日本語よりも一段と明瞭に発音したい。live [liv] と leave [li:v] , who [hu:] と whom [hu:m] なども、やや誇張気味に発音する。
- 3) 必要に応じて、同音異義語にはスペリングを入れる。
- 4) とくに必要な場合を除き、括弧、下線、コーテーションマークなどは、出来るだけ音訳技術で処理する。
- 5) 本文と紛らわしくなる語、例えば、アンダーライン、ダッシュ、キャピタルなどは避ける。
- 6) 数字、年月日などは、場合によっては日本語で読む。
- 7) スペリングではないが、対面朗読などで発音記号を説明する場合は、発音記号の点字を参照するとか、「アサヒのア」などの要領で次のようなメモを準備する。  
例：cat の「æ」, bus の「ʌ」, father の「ɑ:」, bird の「ɜ:」, ing の「ɪŋ」。

## C. 音訳テープを聞きながら点字を打つ場合でも、本来の読みのままでよい。

例えば、ü は「ウムラウト・ユー」ではなく、本来の読みである「ユー・ウムラウト」と読む。括弧、下線、コーテーション・マークなども、ごく短い間隔に使われている

場合は、「・・・に下線」などと、区切りのよいところまで読んでから処理するほうがよい。Aの7)などの処理も問題はない。

D. 英語に関して知識は充分あっても、音声化することに躊躇や抵抗を持つ音訳者は多いと思われる。しかし、例えば日本語的な発音であっても、今まで述べたような注意を払うなど、積極的に工夫を試みることにより、英語的な発音に近付けようとして、曖昧かつ不明瞭になり、利用者にとって理解しにくいものになるよりも、結果として利用価値の高いテープを作ることが出来ることも考えられる。しかし、その場合、英語には日本語にはない発音があることに留意して、必要とあらば、スペリングをいれるなどの処理をしたい。(前後関係からしても理解しにくい場合、原本のキーポイントになると思われる語などの場合)

例: read と lead, write と light, she と sea, boat と vote, bus と bath, close(v) と clothe, height と fight などは、区別がつきにくい。

E. 英語そのものの音訳に関しては特に困難を感じない音訳者についても、改めて、すべての録音テープ製作者に要求される、基本的な考え方を再確認して頂きたい。日本語の音訳者が、朗読を聞かせる朗読者や、日本語の教師の立場に立つ者でないことは自明のことであり、かつ出来るかぎり正確に、明瞭に、また、耳で聞いて理解しやすい処理に努力を重ねていることは、例えば、英語のネイティブ・スピーカーが英語に堪能だからと云って、日本人の利用者に対して容易に利用価値の高い英語の音訳テープを作れるとは限らないことを意味してはいただろうか。ヒヤリング用のテープを作ることは私達の仕事ではない。前述したように、利用者の英語に関する能力はさまざまである。次のようなことに留意してほしい。

- 1) 一般的な音訳技術の基礎をしっかりと身につけること。
- 2) 処理については、日本語のもの以上に注意、検討すること。
- 3) スピードが早すぎないこと。
- 4) 本来の英語のリズムを壊さないようにしながら、なおかつ、一語一語をはっきりと、確実に音訳する方向に努力すること。利用者の理解を第一に考えれば、英語の発音についても、妥協せざるを得ないこともあり得ること。

以上。

(1989.10.5)

### 《録音の現場において》

- 1) モニターで聴きとれる雑音は、全て録音しなおしておくこと（首を動かした音、椅子の音、お腹のなる音、頁をめくる音、隣の編集室の音、外の話し声等）。
  - 2) 訂正箇所を上手くはめこむ技術をマスターすべきである。
  - 3) 訂正録音が済んだ後、必ず前後を通して聴き直してみる（次の文の頭が消えていることが多い）。
- 等、編集段階では解決できない問題が指摘されています。

### 《音訳・校正・編集の三者組み合わせを最初に決めることについて》

- 1) 読み方について判断できない場合、相談した上で録音できる。
  - 2) 三者相談がなされた上の読みには校正があげにくい。
  - 3) 最初の打ち合わせの際、三者共に本の内容を把握していなければ何にもならない。
  - 4) 原本を三冊用意して、追いかけて校正をしてほしい。
  - 5) 幾通りも読み方がある語は、調査表に書き込み、断定の理由を書いてマルをするなり、モニター用の原本にルビをふっておく。校正者は音訳者の選択に同意する場合はOKサインをしておく。それに編集者が訂正を要求する場合は説明を加えるなり、話しあいをする。
  - 6) ファイルにワクアナの順序を最初に記しておく。
  - 7) ファイルに三者連絡表を設ける。
- その他、様々なご意見があり、音訳者にとっては大変望ましいところなのですが、2) 3) のように懸念する声もありました。

(次号へ続く)

### — 編集後記 —

5日の話し合いに、ご参加下さった皆様どうもありがとうございました。突然のことでお仕事予定通り進まなかったことを申しわけなく思っています。川端さんがいらっしゃらなくなったらどうなるのか、ボランティア一同、大変気になる所です。当面、職員側の戦力低下はさげられないこと、いい形で私たちが応援出来たらと願っています。

「ろくおん通信」の発行をお手伝い下さい。一回限りでも結構です。今回のスタッフまでお申し出下さい。(久保)

今回のスタッフ	工藤和子	古谷穹子
	久保洋子	清水賢造